

花の降る谷

野中 秋穂

ある春の日、太陽が最も輝くころ。

森の中の小道に、ふわりと花が舞い落ちた。強い香りと桃色の細い花卉を持つ美しい花。歩いてきた娘が気づき、それを手に取った。

「あ、トラオム。〈夢〉を魅せる花！」

あまい香りを吸いこみ、微笑む。木漏れ日の中、嬉しそうにくるくると花を回しながら、住み慣れた村への道を下っていった。

ここは、いくつもの高い山の間の谷。周りの山は高すぎて誰もよりつかない。そんな谷に、木々のドームにおおわれた小さな村をつくり、ひっそ

りと暮らしている人々がいた。言葉も姿も違う谷の外の人とは干渉せず、谷から出ることもなく、彼らは農業や猟をして自然とともに暮らしていた。山々から舞い落ちてくる花―薄紅色の花卉を持つトラオム―を夢のようにきれいだと思ひ、自分たちが住む谷を花の降る谷と呼んでいた。

人々の暮らしを、緑萌える森の中で見守る小さな影がいくつもあった。森の精、ロカル。ロカルは、やさしい心を持った精霊だ。人とも仲が良く、特に山に囲まれたこの土地ではおとぎ話以上の存在感を持って人のそばで暮らしていた。

彼らは普段は紅い翼をもつ小鳥の姿で木々を飛び回り、森を見守っている。しかし、ロカルは森を守る精霊。小鳥の姿だけでなく、森に災いをもたらす者がいる時は、大きな動物の姿をかりて戦う。さまざまなた姿をもつた精霊である。

精霊に守られた花の降る森、初夏のこと。

小さな籠を持った少女が、細い獣道を音も立てずに歩いていた。年は

10をふたつみつつ過ぎているだろうか。華奢で小柄な体つき、しかしはかなげな面差しと柔らかな白い髪に似合わないほどに、その深い紅色の瞳は賢そうな光を宿す。

彼女はときどき足を止め、足元のきのこや草を少し摘んでは小籠に入れる。頭上にも手をのばしているらしく、籠の中には木の実もすでに満載だ。ぱたっ、ぱた、ぱた……

行く手の森の中からひびく、小鳥の羽音。ぱつと顔を上げた彼女の耳に聞こえてきたのは、

「あ、こっちは人の村だ。行ってみたいなあー！」
人の言葉だった。

「え……？しゃべってる!？」少女は叫ぶ。

「うわ、やばい！」小鳥も叫ぶ。

聞き違いだと思った。そうであってほしかった。でも、何回聞いてもそれは人語だ。

動転して籠ごと転んだ彼女の目に映ったのは、やはり動転したのか悲鳴を上げて下草に突っ込む紅色の小鳥の姿だった。

しばらくしてシヨックからたちなおった彼女はそつと起き上がり、小首をかしげる。動けないのか、小鳥はどこにも行かずにその場でじっとしていた。

「言葉を話す小鳥？なんか聞いたことあるような……」

ぺたりと地面に座り込んだ彼女のことばに、草の間でふるえていたちいさな小鳥はぱつと飛び上がる。空中でぐるりと宙返りを決めると、その場には小鳥の代わりに少年が立っていた。炎色のくせのある髪、一気に心を許したあどけなくてかわいらしい笑顔。

「ぼくはロカルのキノ。この夏で十二歳になるんだ」

彼の名乗りを聞き、彼女は少し目を大きくした。ロカルというその名を聞いたことがあった。確か、祖母のひざの上で。

（この森にはねえ、精霊がいるんだよ。言葉を話す小鳥を見たら、『ロカ

ルですか、森の精霊さんですか』ってきいてみるんだ。きつと、いい友達になってくれるよう。」

祖母のやさしい声を思い出し、頬にふわりと笑みがこぼれる。

「ロカル！森の、精霊でしょ？」

「そうだよ。森の奥に住んでるの」

嬉しそうにうなずいたキノは、彼女に問いかけを返す。

「君は、人間？はじめて見たよ」

「そうよ。わたしも初めて見た。・・・精霊なんて」

「そっか。仲良くしようね！えっど？」

「マリアっていうの。よろしく、キノ！」

微笑みあつた少女と精霊を、優しい風が包み込んでいた。

ふたりが出会ってからおよそ一年、夏のある日にその事件はおこつた。それは村の夏祭りが行われる日。昼間からかがり火が焚かれ、熱をはらん

だ風は山をかけおり、谷を吹きすぎていった。そんな風の日には、一日にいくつも花が舞うのがいつものこと。だがその日に限って、土くればかり降ってくる。

「夏は花盛りの季節なのに。キノ、やっぱりおかしいよね？」

わずかに眉をひそめてキノを見上げ、問いかけるマリア。一年前に出会ってからというもの、ふたりは毎日のように森を駆け回り、すっかり仲良くなっていた。マリアの言葉をきいて、キノは何だかいやな予感がした。

「マリア、ちょっと待ってて。山の上を見てくるから。」

それだけ言うや、枝から空へと飛び立った。

飛んで、飛んで、山頂が見えた瞬間。

「！」

キノは、ことばを失った。トラオムが一面に咲きほこっていた山頂は、今や見る影もなかった。植物はすべてなぎ倒され、土は掘り起こされ、その美しさをなくしていた。

誰も寄りつかないはずの山の上を這い回る巨大な甲虫のようなものを、キノは呆然と見つめていた。

ジリリリリ・・・

枕元から響くアナログな時計の音に、村田真治は目を覚ました。まずい。新しい開発の計画を練るから早く出社するようにと社長から言われていたのに、すっかり頭から飛んでしまっていた。

慌てて支度をし、ジャケットをはおりながら階段を下りる。こんな田舎に電車は少ないので、部屋を出て向かうのは愛車だ。会社に車を走らせながら、真治は周りの景色を見るときもなく眺めた。水田、川、山、また水田……。この辺りは山がちで人口も少なく、過疎化が心配されるような地域だ。勤める観光開発の会社は、自然を活かした観光をコンセプトに順調に収入を伸ばしていた。

―僕が部長か。まだ実感わかないな。

真治はビルに向かって早足で歩きながら思う。もともと東京にある外資系の会社で働いていて、やりがいもあったが、ストレスも多くて辞めざるを得なかった。ここにやってきたのは三年前だ。昨日社長に呼び出されて、今日の早番と部長に任命するとの連絡を受けたばかりである。

「おお、村田君。待ってたぞ。」

よく通る声に呼ばわれ、真治は顔を上げた。

日に焼けて浅黒い顔のおじさん、この人こそ大井観光開発グループの社長である、大井良隆だ。行動も発言も豪快、しかし彼はとても頭がいい。さまざまに調べ、絶対に大丈夫だと確信をもって仕事を進めるから、ほとんどハズレはなかった。

さらに、柔軟な考え方と発想を持っている。自分が優れていると思っっているわけでは決してないが、年功序列型になりやすい中小企業で、三十にもならない若造を部長に抜擢。しかも部などほぼ一つしか存在しないため、部長は実質ナンバーワンだった。

「さっそくだが、本題に入ろう。実は新しい観光施設の建設を考えてい

てだね」

部屋にはいるなり、大井はそう切り出した。こちらの都合はどうでもいいようだ。もう慣れたが。

「この近くに水晶岳があるだろうか？うちの親族が山の権利書を持っているんだ」

水晶岳。別名黒岳とも呼ばれる、北アルプスの中央あたりに位置する山だ。とても美しいことで有名であり、日本百名山にも登録されている。彼の話は要するに、私有地となっている山に観光施設を建設し、リゾート地として観光客を呼ぼう、ということらしい。

「しかし、少し利便性が悪すぎませんか。水晶岳は確か三千メートル近くあったはずですが」

「それが良いんじゃないか。客は日常を忘れに来るんだぞ。本格的登山をするような山に気軽に来られたら、きっと人が集まる。山をまるごと貸切ります、なんて事もできる！」

「そう……ですね。レジャー等を楽しめる環境なら、なお良いかもしれません」

「ああ。さっそく視察に行ってみよう。今日なんかどうだ？」

「今日、ですか！急すぎ……いえ、僕の仕事は片付いてます、予定は特にありませんっ」

真治を見て、大井はにやりと笑った。面白いものを見つけた子どものように、目をきらめかせて。

「よし、なら行くぞ、村田！」

『君』がさっそく消滅した。この豪快な社長に、これまで以上に振り回される日々がはやくも見えるようだ。真治はちいさく苦笑いをこぼしながら大井の後を歩き出した。

車で川を遡って三時間以上、ようやく水晶岳のふもとに到着だ。長時間の移動でそろそろ腰が痛い。シートからすべり降り、ぐうっと背中を伸ばし、そのままの姿勢で真治は山を見上げて絶句した。

「これは・・・なんて雄大な、」

スケールが違う。無数の樹木があるのだろう山肌。それは見上げるアングルでは深緑のモザイクに見え、水晶岳から連なる山脈が空を覆うように広がっていて圧倒される。山が生きている気配というのか、霊気とでも呼べそうな存在感がすごい。流れる川も、大気まで凜と澄んでいるような感じだ。

「そうだろう。この自然をもっと発信していけるなら、最強の武器になる」大井の静かな声が耳にしみた。ここなら、たとえ遠くても来たいと思えるだろう。そう確信している声だった。

今からでは頂上は無理だということになり、二人は手近な森に入ってみることにした。若草の季節、あらゆるところから新芽が芽生えて森は静かな活気に満ちていた。森の入り口にあたる場所だからなのか、木は思ったよりもまばらで陽が入り、地面もわりと歩きやすい。見上げた印象からもっと混沌だと思い込んでいた真治は少し驚いて、でも優しげな雰囲気とやわ

らかい森の空気はとても気に入った。言葉はもう必要なく、森の美しさだけが彼の胸に染み入るのだった。

本格的な工事が始まったのは六月のことだ。開始は早すぎるぐらいだが、大井の強い押しと真治以下社員の連携がすばらしく段取りは手早かった。工事の始めに、山頂近くまで小型重機が通れる道をつくる。これは後々観光客が通る道にもする予定なので、なるべく景観を壊さないように、きつすぎるルートにならないようにと何度も検討された。

機材と重機を運び上げ、山頂での工事は一か月後の七月に開始された。高山植物らしい甘い香りの花がいっぱい咲き誇る原に重機を乗り入れるのはいささか抵抗があったが、ともかく平らにしないことには建設作業ができない。ここでも、少しでも自然を守ろうという取り組みが行われた。

真治が、谷になっている山の反対側へ降りてみたのは、山頂での工事が始まってまもなくの事だった。その日、現場に来ていた真治は谷の方から

うつすら煙がたちのぼっているのを見つけた。

「社長、確かにあれは煙ですよ」

「煙・・・？霧のように見えるぞ？」

「霧ならもつと地面近くに発生します。それに、昼間に霧はそうそう出ませんよ」

うつすらとした煙だったが、山火事でも起こったらことだ。高度差は少しあるようだが、そう遠い場所でもないし、迷わなければ大丈夫だろう。真治は大井を説き伏せて谷に下り始めた。

しばらくは木々も薄かったが、突然立ちふさがるような形で森が姿を現した。ふもとの方は明るいのに、ここは木が密集して入り組み、どこも暗く暗く霧囲気だ。標高も高いのに、なぜか大きな木が生い茂って進みづらい。

「村田、あの鳥はなんというんだ？見たことがない」

大井の声に顔を上げると、ピチピチと鳴き声が耳に飛び込んできた。声

の主は・・・いた。ゆく手の木の枝にとまる二羽の小鳥だ。羽根は目の醒めるような赤、目立って襲われないか心配になるほど鮮やかで美しい。

「僕も見ることがないですね・・・。固有種、でしょうか」

もう一度小鳥が鳴く。もう片方がそれに応えるように鳴くと、二羽は同時に翼を広げてさらに奥へ飛び去ってしまった。

「きれいな鳥だ。あの鳴き声で起こされる朝も悪くない」

大井は野鳥をモーニングコール扱いである。真治はちいさく笑ってそうですね、と答え、あとは二人とも歩くことに専念した。だんだんと足場が悪くなってくる。

森に入ってしまった頃。右手のほうの景色にわずかな違和感をおぼえて真治は立ち止まった。自分でも何を見咎めたのか分からなかったが、少し近づくと分かった。大木の根元に、小さな白い塊がある。花の群生とかではなく、もつと立体的な、そう、ちょうど人がうずくまっているような・・・。そこまで考えて背筋がぞくりとした。

「・・・人・・・？」

なぜこんな山奥に人がいる。きつと違うだろう。真治はもつと近づいてみることにした。なんだなんだと聞いてくる大井に指をさしてそれを示し、黙ってもらおう。ゆっくり、ゆっくり歩いていき、少し手前で静かに止まる。やっぱり人だ。大樹に背を預けて眠っているような感じで、ぴくりとも動かない。白いフード付きマントのせいで顔は分からないが、一見してわかるほど細くて小さい身体をしていた。どうやら少女のようだ。さらに近づき、フードの端をつまんだ真治におそるおそる大井が声をかける。

「い、生きてるのか？白骨死体とかだったら・・・」

「不吉なこと言わないで下さいよ！もう触ってるんですから」

手足もよく見えないからその可能性は大ありだ。逃げ腰気味でそつとフードを引つ張ると、目を閉じた白い顔が半分ほど見えた。同時に真治の手にかすかな吐息がかかる。

「・・・よかった。普通に人間ですよ。」

ほうっ、とため息をついた真治は、新たな疑問に首をひねる。

「でも、なんでこんな山奥に女の子・・・？そもそも人がいるんでしょうか？」

その問いに答えられる人はいない。真治も元より大井が答えてくれるとは思っていない。考えこんでしまった二人の前で、眠りこんでいた彼女が突然身じろぎをした。大木によりかかったままそんなことをするから、その身体はぐらり、傾いで地面にたおれた。

「あ」

見事に頭を打ちつけた彼女に二人の声が重なる。その声が聞こえていないのか、まだ寝ぼけているようにゆっくりと身体を起こしたその姿。真治は一瞬、息を忘れた。

フードがふわりと肩に落ち、顔が完全に露わになっっている。肩にかかる長さの髪は透明感のある白色、まるで絹糸のよう。きめ細やかな肌は、日本人にはありえない白磁のような色合いと美しさを持つ。彫りが深く鼻筋

の通った、双眸もぱつちりと大きいきれいな顔立ちの少女だった。葡萄酒のような鮮やかな真紅の瞳が、ゆるく瞬いてこちらを見つめる。アルビノと呼ばれる神秘的な色彩が、彼女を非現実的な存在に見せていた。

どれくらい見とれていただろうか。多分そう長い時間ではないはずだが、しばらくしてようやく彼女がふるえていることに気付いた。しかも明らかにおびえきった顔でこちらを凝視している。

「」

どうかしなげればと声を出しかけた真治だが、彼女が懸命に口をぱくぱくさせているのを見てやめた。どうやら何か発音しようとしている。

「ヴ・・ヴィー、ハイセン？」

真治は耳を疑った。彼女のふるえる唇から発せられた言葉は日本語ではなかった。白く透き通るような外見からして異国風だが、それでもやはり耳慣れない。元外資系の強みで真治には何とか聞き取れたようなものだ。『あなたは誰？』という問いかけは、ドイツ語、それも少しなまりの入っ

た言葉である。

不思議な巡り合わせに感謝しながら、言葉を返そうと口を開いた。

『はじめ、まして。僕は真治というんだ。君の名前は？』

決して流暢とはいえない、片言に近いようなドイツ語。伝わってくれと祈るしかないが、彼女ははっと大きな瞳を見開いた。伝わっているようではある。

『・・・シンジ、さん？わ、わたしはマリア。』

返事が返ってきたことに驚いたのか、はたまた聞き取りづらかったのか、彼女はしばし固まってから返事をくれた。

『マリアちゃん、だね。僕らはあやしい者じゃないよ。よければ、君の事を少し教えてほしいんだ』

『えっ？ええと、わたしの名前はマリア、年は十五。この谷に住んでるの』
最初こそ怖がっていたものの、人懐こいのか質問には答えてくれた。しかも的確に。やっぱり谷には人が住んでいたのかと感心する真治に、大井

がこそりと耳打ちする。

「いったい何の話をしとるんだ？ さっきぱりわからんが」

飛び上がるほど驚いた。少女、マリアと出会ってから一言も発さなかった大井の存在をほとんど忘れてしまっていた。無意味に跳ねる、心臓をおさえて、ささやき返す。

「か、彼女のことを聞いていたんです。マリアという名前だそうで、この谷に住んでいるとか」

「本当なのか？ そうなら、さっきの煙はこの子らの家の煙なのかもな」
「そうかもしれませんね」

真治はそれに賛同して、ふたたびマリアに向き直る。家の場所を聞こうとして、森の奥から飛んでくる赤い小鳥に気付いた。小鳥はまっすぐにマリアの肩にむかい、そこに舞い降りた。それを見て、二人は口々に叫ぶ。

「あの鳥、さっきの！」

「森の端に・・・いた奴じゃないか！」

マリアの耳元でピチピチと鳴きたてる声も、広げた赤い翼も一緒だ。それにしてもよく人に慣れていているな、と真治が思った途端。

『シンジさん、お願い助けて！』

マリアの悲痛な声が空気を裂いた。紅い瞳に困惑の色と涙を浮かべて、もう一度叫ぶ。

『お願い、山が、わたしたちの山が崩されてるの！』

『山が？ なぜ・・・あっ』

思わずオウム返しに叫んでしまったから、真治ははっと口を押さえた。彼女の言う『山』とは、この谷の周囲の山に他ならない。そして、大井観光開発グループのほかに工事をしている団体や会社はいない。

つまり、『山を崩して』いるのは真治たちである。これを知られたら、きっと、いや確実にマリアは逃げ去って戻ってこないだろう。突然叫んだ真治にマリアの目が集中している中、とっさに考えた真治は、彼女の信用を損なわないために言葉を続けた。

『ええと、山ってどこの山か、分かる？』
聞かなくてもわかる。すぐ北の水晶岳だ。

『こ、ここから北に行つたところの山頂みたい。樹はあまりなくて、花畑があるところ。わたしは行つたことないけど』

山の場所、見事の中。なりゆきに軽く頭痛をおぼえながら、ふと浮かんだ疑問をぶつけてみる。

『何処の事なのか、なぜ分かるのかな。その様子まで』

『あ、彼が教えてくれたの。わたしの親友』

言いながら指したのは、その肩の上。つぶらな瞳と赤い羽根を持つさつきの小鳥だった。

『マリアちゃん、その子・・・鳥、だよね？』

返答が多少おぼつかなかったのは仕方ないものとしてほしい。こんな話、誰だつて信じられない。

『鳥じゃないよ！彼はロカル、森の精霊！・・・知らないの？』

さらに信じられない事を聞かされて絶句する。しかも、マリアは知らないのが不思議、といった様子だ。

『ごめん、知らない。よければ教えてもらえるかな。』

真治のリクエストに応えて、マリアは色々なことを教えてくれた。彼ら、ロカルという名の精霊は昔から人と仲が良かったこと。森を守る精霊と仲が良いおかげか、彼女が暮らす二百人足らずの村はずっと平和だったこと。そして、そのキノという精霊はある初夏の日にマリアと出会い、それ以来親友だということ。ただ、マリアが人語だと主張する彼らの鳴き声は、真治にはいくら聞いても小鳥の声にしか聞こえなかったが。

『どうもありがとう、マリアちゃん。おかげで勉強になったよ』

『どういたしまして、シンジさん・・・でも、彼らロカルにも山を掘り返してる奴らの事はわからないんだって』

意気消沈したような憂い顔に、たまらなくなつた真治は思わずその手を取つた。小さな手をそつと握り、驚いて見開かれた瞳に視線を合わせて大

丈夫だと強く言いきる。

『そのことなら僕が力になれるかもしれない。もしかしたら、止められるかもしれないから』

『ほんと？本当に、助けてくれる？』

ぱつと明るくなった顔につられて、真治も笑みをこぼした。

『大丈夫。必ず、良くなるから』

『ありがとう！わたし、もう行かなくちゃいけないの。・・・また明日、ここに来てくれる？もつと話したい』

『もちろん。じゃあ、気を付けて帰るんだよ』

マリアはにつこり笑ってうなずくと、木々の間を走っていった。その背中が緑に隠れてすぐに見えなくなる。

「不思議な子だなあ」

「ええ。とても神秘的ですね」

ぼそりとつぶやかれた言葉に、真治は深くうなずいた。大井に向きなおる。

「そういえば、」

マリアと話していたことを伝えなければ。一つ一つ思い出しながら話していたが、最後のほうになって青ざめる。なんてことを言ってしまったんだろう。どうにかするなんて、勝手に無責任なこと。しかし　大井に言うしかない。

「社長……。僕、あの子に工事現場をどうにかするって言ってしまったんです・・・」

「そうか。うん、まあ一時中止はせざるを得ないだろうな」
反応は意外だった。あまりにさらっと話を流されてしまったので、聞いていないのかと思ったほどだ。

「あ、それなら良かったですが」
気が抜けてふつと頬がゆるんだ。大井も微笑み返してくる。森を抜けて木々が開けると、もう山の美しい夕焼けがそこまで来ていた。

村まで帰りつき、キノがどこかへ飛び去ってしまうと、マリアはほうつと長いため息を吐いて座り込んだ。今日は色々なことがありすぎて疲れてしまった。何せ知らない人と会ったのも初めてだったし、その後キノに聞かされた話はショックが大きすぎる。

—山が、掘り返されてぐちゃぐちゃなんて。

でも、『大丈夫だ』というあの声を思い出すだけで心が少し落ちついた。明日も会える。それが純粹に嬉しかった。

「マリア、大丈夫かい？」

不意に上から声が降ってきた。

「あ、おばさん。わたしは大丈夫。それよりみんなは？山のこと聞いた？」

「ああ、聞いたさ。さつき口カルたちが何羽も飛んできて、村じゅうに知らせてくれたよ」

それなら大丈夫だ。神経がゆるんだのか一気に疲れが出てきて、眠くなっ

てしまう。

「おばさん、ありがとう。わたし、家に帰ることにする・・・」

それだけ言って、ぐっと力を込めて立ち上がる。家に帰ってベッドに倒れこむまでの間、シンジと名乗ったあの姿が落ちかかるまぶたの裏にはりついていった。

シンジももう一人も黒髪に黒い目で、どう見てもマリアたちとは違っていた。谷のみんなは金髪と青い瞳をしていて、マリアのように白い髪に赤い目を持つ人も多い。

—あの人たちのこと、みんなに伝えた方がいいかな・・・？

おぼろげになっていく思考の中で、マリアはそう考えた。でも。

—山を守るって、どうにかするって、言ってくれた。みんなに言ったら、きっと攻撃されてしまう。よそ者だから。

言わないことに決め、マリアはあたたかい眠りにすべり込んでいった。

眠り込んだマリアを窓の外から見つめ、キノも軽くため息をついた。まだ幼い翼で山頂まで飛んだら、山が崩されていた。今まで経験したこともないシヨックから立ち直って慌てて帰ってきたとき、もうマリアはいない。そのうえ探し回って見つけたら、今度は知らない男たちと話している。まったく疲れた。彼女はとても賢いけれど、ときどき驚くほどに無防備だ。キノのほうが年は下なのに、ときどき妹を見るような気分になる。そういえば、彼らはなぜ森に入ってきたのだろうか。マリアたちの村は木々におおわれて、外からは 絶対に見えないよう守られているはずなのに。

「キノー？いるか？」

背後の森から呼び声が聞こえた。父さんだ。

「いるよー！ここにいますー！」

叫んでぴんぴん飛び跳ねる。すぐに父さんは飛んできた。

「どうしたの？夕飯はまだでしょ？」

「そうじゃない。今から山を見に行くが、お前も行くか？騒がないなら連れてってやるぞ」

「さわがないよ！早く行こう！」

本当か、と言いたげな父さんだが、行くぞと翼を振って先に飛び立った。後につづき、二人で頂上を目指す。森の端の木に並んでとまった。

「あれか？お前が見た、甲虫のバケモノみたいなのやつは」

「そうだよ、父さん。あいつが這い回って、トラオムを踏み潰してたんだ！」

『あれ』を見つけてまた怒りがわきあがってくる。夕暮れの山の上には、もう動かない『あれ』と一緒に黒い髪をしたたくさん人間がいた。谷の優しい人達とは違った、見たことのない人間。いや、正確には、一度見た。今日の昼、マリアと話していた二人も、あんな髪色をしていた。

と、そのうち一人が振り返ってこちらを見つめた。細身の若い男。なんとなく見覚えがあるような気がしてそいつと隣の中年男を眺めていると、

昼の記憶がよみがえった。

—あいつだ！マリアに話しかけてた！

親しげにマリアと話し、手まで握って『大丈夫』だのと話していたくせに。あいつらが山を崩してるのにあんな事を言うなんて、立派な裏切りじゃないか。怒りで頭の芯が煮えたぎって何も考えられない。

「父さん、ぼくもう帰ってもいいかな？気分が悪いんだ」

「大丈夫か？一人で帰れるか？」

「大丈夫。じゃあね、父さん」

声かふるえないようにそれだけ言って、乱暴に枝を蹴って飛び立つ。全部めっちゃめっちゃにしたいくらい怒ってるのに、いくら強く、激しく羽ばたいても木の葉一枚そよがない。なんてぼくは小さいんだろう。

森を抜け、やっと着いた窓の前で荒い息をととのえた。出来る事なら言いたくない。マリアの悲しむ顔は見たくない。

「キノ！よかった。どこに行ってたの？」

でも、窓は開かれてしまった。マリアには話さないといけないことだ。

「山の上だよ・・・マリア、大事な話があるんだ。つらいけど、聞いてほしい」

まばたきをして首をかしげるマリアに、キノは重い口をそつと開いた。

昼間彼女と話していた男、そいつが山の上に行ったこと。山を崩していた奴らの仲間だろうということ。嘘なんかついていないのに、途中からマリアの顔が見られなくなってしまった。

「そんな・・・、ひどい。何とかするって言ったのに」

彼女の長いまつげがづらそうに伏せられる。キノだって、マリアを悲しませたくはないのに。その上、心配事はもうひとつ。

「それにわたし、あの人に色々言っちゃった。ロカルのこととか、谷に住んでるとか・・・！」

そう。彼らが谷を暴こうとする奴と知っていたら、谷のことなど教えなかったのに。それはマリアだけの責任じゃない。どうにもできなかったキノ

ノも悪い。でも、一番悪いのは。

「マリア、明日あいつらと会うのはやめたほうがいい。・・・もう、会わない方がいい」

マリアはさつきよりもつらそうな顔をした。

―会えないなんて、嫌。

ぎゅっと噛みしめられた唇から、そんな声が聞こえてきそうなほどに。彼女をだました、ぼくらをだましたあいつらを谷に入れちゃいけない。キノはもう一度決意を固めた。

谷を、守らなければ。

『マリアちゃん、マリアちゃん、いないのかー？』

何度よびかけても、返ってくる声はない。

『また明日、来てくれる？』一片の曇りもない笑顔。その微笑みに嘘はなかった。

―どうしたんだろうな。

待ち合わせの大木の周りを探し、迷ってしまいそうなほど森に深く分け入っても、マリアの姿を見つけないことはできなかった。その日だけでなく、翌日も、そのまた翌日も。

真治が森に通いはじめて、四日目のこと。

朝から森に入り、歩き回って彼は疲れてしまった。マリアと最初に出会ったあの大木にもたれていると、木々の間にちらりと白いものが見えた。こちらに歩み寄ってくる、白いフードをかぶった人影。あれは、マリアだ。

『マリアちゃん！ いったいどうして』

ふっと顔をあげたその視線にきつく射すくめられ、声が途中で喉にひっかかった。確かにマリアには違いない。肩にこぼれる白い髪も、フードの奥に見える白い顔も。その眼だけが違った。澄んだ葡萄酒色だった瞳は、燃える焔を宿し、らんらんと鋭く光っていた。

『シンジさん、わたし、あなたを信じてたの。でも、もう無理。あなた

はわたしに嘘をついたし、わたしは谷を守らないといけないから』
こちらをきくと睨んだままつむがれる言葉に、真治はなかば呆然と聞き
いった。違う。嘘なんてついてない。本当にどうにかしたかったんだ。僕
は、僕は。

しかしもう一度マリアと視線が交錯し、真治は悟った。そんな言葉はも
う意味もないと。強い赤、瞳の輝きは拒絶の色。

『さようなら』

突き放すような声でそれだけ言って、駆け去る彼女。真治は追いかける
ことも出来ずにただ見送るだけだった。先に言っていけば良かったのだろ
うか。どうにもできない悲しさが、重く冷たく胸に沈んだ。

足が地面を蹴るたびに揺れる視界が、突然じわりとにじんだ。涙は一気
にあふれて頬をつたい、風に吹かれて散っていった。森を必死に走ってい
たマリアは立ち止まり、涙をぬぐって天をあおいだ。心臓がぎゅつと掴ま

れたように痛い。

『さようなら』

耳の奥で何度も何度も、冷たく言い放った自分の声がリフレインする。
瞳を閉じれば、彼の傷ついた顔が浮かんで苦しくなる。

—つらい。会えないのがつらい。傷つけてしまったのがつらい。

でも、わたしが悪いんじゃないはず。彼が山を崩して谷を壊そうとして
いた、とキノは言う。キノは絶対に嘘はつかない、だから悪いのは彼だ。
でも、それでも心は揺れる。胸が痛くて息ができない。

—悪人なら悪人らしく、最後まで嘘をつき続けてほしかった。それなら、
憎めるのに。だましたのはあの人のために、なぜわたしがこんなに苦しいの？
涙は何度ぬぐっても止まってくれない。流れしたたり続ける滴をそのまま
に、どれくらい立ちすくんでいただろうか。答えの出ない問いを胸に抱え
たまま、マリアは足をひきずってもう一度歩き出そうとした。

そのとき。

「マリア、マリア。どうして泣いてるの？」痛い胸にしみ込むような優しい声がした。見上げた枝には三羽の小鳥。赤い羽根が鮮やかだから、女の子のロカルたち。

「山が大変で、悲しいの？」

「大丈夫だよ、マリア。私たちが助けてあげる」

「これから、あの人間たちに思い知らせてやるんだ！」

慰めてくれようとする純粋な言葉。でもそれは、今のマリアにとって不安を煽るものでしかなかった。

「待って、何をするつもりなの！？」

「今からね、私たちロカルで、あいつらが連れてる化け物を倒してやるんだ！」

「怖がらなくていいよ、マリア。私たち、怪我したりしないから」

言い終わると、優しい声で話していた一羽が地面に飛び降りた。空中でくるりと一回転、降り立ったのは大きな赤毛の犬だった。

「ほら、私たち強いから」

「分かった、ありがとう。……ねえ、わたしも連れて行ってもらえない？」この目でみて、そして区切りをつけたい。この心の痛みも消えてくれるだろうか。

彼女たちはそっと顔をみあわせて、優しい声の彼女が微笑んだ。

「いいよ、マリア。私の背中に乗って。その方が速いから、ね」

四日前とよく似た黄昏の山には、ロカルたちが集結していた。十数頭もの、今まで見たこともない紅い群れ。マリアを連れてきてくれた彼女のよくな赤毛の犬、胸に真紅の三日月を刻んだ熊、赤い翼を持つ猛禽。どれも本当の動物よりも一回りか二回りは大きい。

「さあ行こうか、皆。人には手を出すな。目標は、あの甲虫の化け物だ！」
「おー！！！」

駆けだしていったロカルたちの後から、マリアは木々の向こうを覗き見

た。『甲虫の化け物』・・・あれだろうか。四角い胴体に、腕みたいなものが一本ついている。ぴくりとも動かないそれは、森が途切れた場所からすぐ近くに三匹、その少し奥に四匹。そいつらの右に見える四角の建物から駆け出てくる人影を見つけて、マリアは息をのんだ。

少し遠いけれど、あれは、シンジに間違いない。さつき区切りをつける
と決めたばかりなのに、どうしても見ていられなくて飛び出した。

「ちよつと、マリア！」

後ろから慌てた彼女の声が出たようだったが、頭の奥が真っ白で、何も考えられない。

—あのままじゃ、ロカルの群れと衝突する！

やっと森を抜けた。シンジも、化け物に襲いかかるロカルたちに顔色を変えて走ってくる。

「だめ——！」

叫んだ声に、一瞬、全ての動きが止まった。驚いたような顔のシンジと

目が合う。もう一度走る、彼のところまで。走り続けてきたせいで目がくらみ、肺がきりきりと痛む。

—あと少しだ、あと少しで手が届く。

息も絶え絶えでたどり着く。シンジの前で両手をせいっぱい広げて背にかばう。ロカルの群れは無抵抗の化け物たちをあとという間に飲みこみ、目の前に迫る。何だか妙に、景色の流れがゆっくりだった。猛々しく吠える口、振り下ろされる前足、真っ直ぐにこちらへ向かう牙。身体が動かさない、怖い。初めてロカルのことを恐ろしいと思った。

—わたし、殺される？

頭の回転まで鈍くて、何も考えられない。紅い波に、今にも飲みこまれ
そうなのその刹那。

『危ないっ！』

後ろから短い叫びが聞こえた。同時に広げていた両手首をつかまれ、身体ごとぎゅっと抱え込まれる。地面が急速に迫ってきて、でもぶつかる前

に身体は止まった。背中に心地よい重さと温さ。一瞬、思考が止まる。

「・・・シンジ、さん？」

「大丈夫。大丈夫だから」

耳元で優しい声がした。あの時と同じ、『大丈夫』という言葉。

―わたしのこと、怒ってないんだ。良かった。

ほっとした気持ちは、顔をあげた瞬間消え去った。周りを、ロカルに囲まれてる。

「お前、マリアから手を離せ！」

「そうだ。ほら早く立て、八つ裂きにしてやる！」

鬼のような顔で口々に叫ぶ。彼らは人間を殺してはいけなはずなのに。怒りで忘れてしまったのだろうか。

―わたしが離れなければ、きつと攻撃しないはず。

自分を抱え込んで護ってくれている腕にしがみつく。彼が怪我したり、まして死んだりするのは耐えられないし、ロカルたちに罪を犯させてはい

けない。マリアは必死に声をあげた。その声が情けなくふるえているのなんて、気にしてられない。

「お願いみんな、聞いて。この人は悪い人じゃないの。今も、わたしを庇ってくれた」

「それに、人を殺してしまったら精霊でいられなくなる。・・・誰が森を護るの？」

途切れそうになる声を必死につむぐ。なぜかわからないけれど、泣いてしまいそうだ。声が届くことを、言葉を聴いてくれることを祈る。

「お願い・・・、人には手を出さないって、さつきも、言ってたじゃない。だから、だから」

「分かった、マリア。君は賢い。俺たちは人を殺せないし、殺したくもない。・・・目が覚めたよ」

途中から涙混じりになったゆれる言葉をすくい取るように、ロカルの一人が力強く言った。そうして笑ってみせる。彼らは嘘をつかない。もう、

これで大丈夫だ。

「あ、ありがとう・・・」

嬉しくてたまらないのに、涙が次々あふれて止まらない。さっきの苦しい涙とは違って、頬をつたう感触はあたたかく、心を溶かすように優しくかった。

「マリアちゃん、どうして泣いてるんだ？もう大丈夫なんだろう？」

「ええ、大丈夫・・・嬉しいのに、涙が、止まらないの」

泣きながら笑うマリアを、シンジは向かい合うようにそっと抱きなおした。優しい微笑みに真っ直ぐ見つめられて少し気恥ずかしい。マリアはその胸に顔をうずめ、大きな手に背中をさすってもらいながら泣いていた。暖かさに包まれて、やがて泣きつかれた身体は沈みこむように意識を手放した。

腕の中で寝息をたてはじめた小さいな身体を、もう一度だけ強く抱きし

めてから真治は腕を解いた。

『君たち、誰かこの子を』

そこに腰を下ろしている赤い動物たちに呼びかける。あの小鳥と同じものなのだと、何となく分かっていった。

『ああ、私に任せて。しばらく眠らせてあげましょう』

進み出てきたのは、真治と同じくらい的身長がありそうな赤毛の野犬。頭のなかに響いてくる声は優しく、少女のような感じがした。もう、言葉が分かることに疑問はない。精霊なのだから、そんなものなんだろう。

『じゃあ、お願いするね』

『もちろん。森に連れていくから、背中に乗せて。みんな、行きましょう』
ロカルたちはマリアを守るようになると困んで森へ帰っていった。

―とても愛されている。大切なお姫様なんだろうな。

微笑んでそれを見送る。もしかすると、森の精霊が大事に大事に守っていたのは彼女たち『谷の人々』なのではないだろうか。ふとそんな考えが浮

かんだ。真治はマリアしか見ていないから髪や目の色はわからないが、彼女が話していたのはドイツ語。彫りの深さと細く高い鼻梁も、ヨーロッパ風だ。日本の山奥にひっそりと暮らす異邦人。それはとても不自然で、見づからなかったのは精霊のおかげではないのかと思うのだ。

ひとりもの思いにふけていた真治は、背後のざわめきに、まだ問題があることを思い出してため息をついた。さっきの騒ぎを見ていたのは大勢いるだろう。

「なあなあ村田、さっきの何だ？女の子もいたよな？」

「それよりあの動物は？ありえない大きさしてなかったかー？」

案の定、くるりと振り返った先には興味しんしんで詰めよってくる作業員たち。本当のことを話すわけにはいかないし、優先すべきことがある。

「ちよつと待て、後で話すから」

仮設の住居に向かって、彼らを避けながら歩く。まずは大井に話さなければ。

「社長、社長いますか？」

「ここだ。村田、今のは・・・」

話が早くて助かった。周りに聞こえないくらいに声を低めてささやく。

「見ました？マリアちゃんたち」

「ああ、攻撃を一生懸命食い止めてる感じだったな。あの子に助けられたのか？」

その通りかもしれない。マリアが、ロカルの群れを止めてくれた。

「良かったな。怪我もしないで」

「はい。マリアちゃんのおかげです。・・・それはそうと、ここでの観光はもう」

ここを拓けば、谷の人々のことは隠しおおせない。ロカルたちの反対も根強いだろう。大井は長くため息をついた。

「その通りだ。水晶岳はとても魅力的なんだが、俺はこの谷に人がいると聞いた時からある話がちらついてな」

「話、ですか？」

首を傾げた真治に、ちよつとした童話なんだが、と切りだした。

『ハーメルンの笛吹き男』という話を、知っているか？」

それは、童話らしからぬ、なんとも後味の悪い物語だった。

八百年も昔、ドイツのハーメルンという街ではネズミが大発生していた。食べ物や、衣服を、家具まで齧るネズミに閉口したハーメルンの人々は、「ネズミ捕り」を名乗る流れ者に退治を任せることにした。流れ者の男は笛を吹き、笛の音で街中のネズミを集め、ヴェーザー川に残らず飛び込ませた。しかし街の者は約束を破り、彼への報酬を支払わなかったという。

怒った笛吹きは、ある朝街に舞い戻り、笛の音で町中の子どもたちを集めて町を出た。親たちが気づいて追いかけた時にはもう遅く、子どもたちは笛吹きに洞窟へ誘い入れられ、入り口は閉じられた。そして、子どもたちも笛吹きも、もう二度と戻ってこなかった！。

「これは、実話が元らしいぞ。それに、笛吹きは赤い小鳥をつれていた、という話もある」
消えたたくさんの子ども。紅い小鳥。ヨーロッパ風の顔立ち。そしてドイツ語。

真治は絶句した。これが、この話が真実だとしたら、すべて辻褃があつてしまう。

「マリアちゃん達が、ハーメルンの消えた子ども……？」

「もしくはその子孫、だな。相当とんでもない話だが、これなら説明はつく」

あの時の真治の考えは、案外当たっていたのかもしれない。ロカルたちが守っていたものは、森ではなく人々だという思いつき。

「だとしたら、これまで誰にも知られずに暮らしてきたわけですね。日本の真ん中で……」

気が遠くなりそうだ。彼らが暮らす谷の閉じた環境はきつと、外部のものが少し混じるだけで崩れ去ってしまうだろう。完璧なバランスを保つ、こ

の小さな世界は。

「もったいないが・・・、ここを暴くわけにはいかない。幸い山の権利書は買ったというより譲り受けたような価格だった。それにうちは黒字続きだし、な」

「はい。この損失は、必ず取り戻してみせます！」
勢い込んでこぶしを握った真治に、大井は頼もしいな、と笑った。

「そうと決まれば、片づけないといけないな。この谷に人工物を残しておくのはまずい。皆には言っておくから、お前は別れのあいさつでもしてこい。忙しくなるぞ」

「ありがとうございます！」

真治は叫ぶなり駆けだした。先程ロカルとマリアが入っていった森へ。

『マリアちゃん、どこだ？』

『ここよ！静かにして。マリアが起きてしまう』

あてずっぽうで叫んだ真治に、さっきの少女の声が応えた。少し左手の

森の奥にいるようだ。

『良かった。彼女は？』

『そんなに早く起きないよ。疲れているみたいだから、ね』

『そうか。彼女に無理をさせてしまったかもしれない』

落ち葉の上で眠るマリア。うつすら微笑んでいるような彼女の傍らに膝をついて、聞こえていないかと思いつつも話しかける。

『マリアちゃん、許してもらえないとは思わないけど聞いてほしい。工事はあの日からずっと、止めたままだ』

『君をだましてしまったこと、本当に悪いと思ってる。でもお願い、信じてほしいんだ。僕はいつまでも君の味方だよ』

その手を取り、そっと額をつけたとき、視界に鮮やかな紅が飛び込んできた。

『お前が、お前がなんで、マリアのそばにいるんだ！』

頬をかすめた翼よりも、悲痛な叫びが心を刺した。マリアとの間を切り裂

くように、鋭く突っ切った影はきつと、キノという名のあの日の小鳥。初めて聞いた声は、怒りにふるえた絶叫だった。

『マリアを傷つけるお前なんて、消えてしまえばいい!』
血を吐くように、喉を振り絞って叫ぶ。尖ったくちばしが、再びこちらを向いた。

突っ込んでくる、瞬間。

『やめて、キノ』

凜とした声が響いた。

『っ!』

はっと羽ばたきをやめたキノは、もどかしそうに一度翼を打ちならした。ゆっくりと身を起こしたマリアの、その肩に止まる。

『どうして止めるの!? マリア、裏切られて泣いてたじゃないか』

『いいの。彼はもう怒ってないし、わたしも彼を許してるから。もう怒らなくても、いいの』

『そんなこと言ったって……!』

『お願い、もう怒らないで。キノが壊れてしまうよ。わたしは大丈夫だから』

『本当に、谷は大丈夫なの? ……マリアは、大丈夫なの?』

『大丈夫よ。わたしが今まで、嘘ついたことなんてある?』

ふるふると首を振って、さらにちいさく丸まってしまった小鳥を掌に抱くマリア。その姿は聖母の名そのままに、優しく美しかった。ふと、彼女は顔をあげて真治に笑いかける。どこか、切なく寂しげに。

『それでシンジさん、もう帰ってしまうの?』

『え!?!』

帰ると言った覚えはなかった。なぜいきなりそんなことを言い出すのだろう。

『だって……、さっきの言葉、まるで別れのあいさつみたいだったから』
聡い。本当はあれで済ませて帰るつもりだった。

『そう、だよ。もう山に手は出さない。僕らは街へ帰るんだ』

『やっぱり。そうじゃなきゃいいって思っても、叶わないものね』

真治がここに居てくれたらいいと。マリアは、そう思ってくれたのだろうか。真治にはそれだけで十分だった。

『ありがとう、君のことは忘れないから』

出会ってから過ごしたのは、ほんの何日か。それでも記憶にはしっかりと刻まれるだろう。そう思ったのに。

『無理よ』

はっとするほど冷たい声音。

『あなたも、覚えていられないわ。この山の事、そしてわたしの事も』

なぜ。問いは声にならずに消えた。彼女の冷たい声の裏に、隠しきれない悲しみがあるのを聞きとったからだ。

『頂上に花があつたでしょう。わたしたちはあれをトラオム、〈夢の花〉と呼んでいるの。ずっと触れていれば別だけど、その香りをかいだら、そ

の間のことは忘れてしまうから』

谷を囲み、来訪者の記憶を消す花。〈夢〉と呼ばれるのはその、すべてをうたかたの夢としてしまう特性からか。その花があつたから、今までこの谷は見つからなかったのだろう。でも、そんなのは知ったことか。

『どうにかして、覚えておく方法はないのかな？何か、ひとつでも』

この記憶を失くしてしまうなんて嫌だ。

『ない、の。わたしには分からない。でも、わたしは忘れない。絶対に』
なんて嬉しい言葉だろう。マリアには救われてばかりだ。

『僕だって忘れない。覚えていてみせる』

『・・・ありがとう』

また、少し寂しそうに微笑んだ彼女は、やはり忘れてしまうと思っ
てるんだろう。それでも、何度でも誓う。子供じみていてもいいから。

日が暮れるまでの時間はとても短くて、真治は帰らなくてはいいけなかつた。最後に別れるときには、あの誓いの言葉を。

『さようなら、マリアちゃん。君を忘れない』

『ええ、わたしも忘れない、シンジさん』

また会える、その日まで。

仮説住居を取りこわし、数日後に真治たちは下山した。マリアは一度も姿を見せず、紅い小鳥の影が時折空を舞うだけだった。大井以下作業員たちと山を後にした真治は、山の麓で深く頭をさげて瞑目し、それから踵をかえした。山には何も残さず、山からは何も持ち出さない。大井と決めた約束を、真治はひとつ破ってしまった。

〈お守り〉を持ってきた。あの、トラオムという名の薄紅色の花を。

トラオムの香りに満ちるこの谷の人々が記憶をなくさないのは、香りを吸い続けているからだだろう。『ずっと触れていれば、大丈夫』そう、彼女も言っていた。

摘み取り、乾燥させても強い香りは消えなかったからきつと大丈夫。こ

の香りがあれば夢は消えてしまわない。誓いを、守れる。

—ありがとう。忘れないよ。

胸の奥でそつとつぶやく。澄んだ空に、応える声があったような気がした。

—こちらこそ、シンジさん。
と。

(了)